



# マスコミ青山

## 会報

Nov.2008 No.27(臨時増刊号)

# 〇七年度総会 ゲストは脚本家一色伸幸氏

一九八二年「火曜サスペンス劇場 松本清張の背梁」で脚本家デビューして以来、映画、ドラマ、アニメ、舞台、ゲームなど数々の人気脚本、まんが原作を手がけ続ける一色伸幸さん。映画「病院へ行こう」「僕らはみんな生きている」では日本アカデミー賞優秀脚本賞を受賞されました。そんな一色さんに「映画」と僕の二五年ドラマものづくりと心の混沌、そして明日」と題うってお話をいただきました。

### 現場人間

「舞台挨拶など人前でお話する機会はたまにあるけれど、包括的に自分がやってきた仕事を通して今のドラマを考えて頂くという講演はやったことがありません。不慣れだと思えますが宜しくお願い致します。僕は四年で中退しているので、落ちこぼれるというなるんだな、と笑って許して頂きたい。」



映画とドラマに二五年かかわってきました。映画会社の偉い人が業界全体を振り返って語ることに意味はあるかもしれないけれど、僕のような一人の現場の人間が主観で語ることに意義があると思います。

昨夜、自分史を作ってみました。くだらないことをしてきたと思っていたけれど、けっこういろいろなことをやってきたな、と感動しました。一時間もあれば作れるので、皆さんもやってみると面白いと思いますよ。」

### 脚本家としての原点

「高校時代から映画やドラマを作りたいと思ってきました。三十年くらい前です。その頃の日本映画界の状況といえば、黒澤明さんがいなくなり、作っても作つても赤字。どん底の時代でした。一方、ドラマ界は倉本さん、向田さん、山田太一さんといった方々が信じられないことにまだ「若手」で、素晴らしいドラマを作っていたんです。自分もテレビドラマを書きたいと思うようになっていました。映画には希望が感じられない時代だったんです。テレビ業界にコネも何もないし、役者は無理だと思って、松竹シナリオ研究所の一期生になりました。当時、二十歳くらいでしたが、一年間、いろいろな脚本の勉強をしました。その時、松本清張、野村芳太郎、橋本忍の霧プロから、助手にこないか、と。すごいレベルの人たちで、まあ、嫌でしたね。僕みたいな若造と大御所の方々では差がありすぎて会話にならない。」



現場で見ていて思ったのは、監督やプロデューサーの仕事は面白いけれど、七割が現実との折衝だということ。予算とか、役者のスケジュールを押さえるとか。残りの三割でクリエイティブな才能を必要とされる。それに対して、脚本家は予算のことも考えなくてはならないけれど、ちょうど逆の割合で七割はクリエイティブでいられて、三割が現実との折衝でやっていく。このへんが好きなことだけやりたいという甘ったれなんですが……。」

脚本とは何なのかというと、ドラマ作りには百人の人が関わりますが、その設計図なんですね。それも百人の人間のフィルターを通して変わっていく設計図です。僕は火曜サスペンスの『松本清張の背梁』で脚本デビューしました。その後で、霧プロを出ます。寄らば大樹とは言うけれど、霧プロは大樹すぎたんですね。二四歳くらいからアニメ脚本だとかテレビ朝の『私鉄沿線97分署』とかを書かせてもらいました。その頃のテレビは「オリジナル」の時代でした。若いライターは仕事をしながら勉強させて頂いたという感じです。八五年、八六年と、だんだんテレビドラマを書けるようになってきました。やつと倉田さんや向田さんと同じところに来られた、大人の鑑賞に堪えうるドラマを書ける、という夢が実現できるまで来たのだけれど……、いま思えば、それを壊したのは僕たち自身だったんですね。」



# マスコミ青山

## 会報

Nov.2008 No.27(臨時増刊号)

### 時代と作品

「一九八七年、バブルの始まりです。『私をスキーに連れてって』という映画作品を作りました。当時の若者映画といえは、内容が暗くて、テーマは自分探し。お金に困っている若者が主人公で、怒鳴り合い、泣くという……。でも、僕らは違う。お金にはそれほど困らず、意見の違いは笑って誤魔化していた等身大の自分たちの映画を作ろう。監督を務めたホイチョイプロダクションの馬場さんは、当時、日立の宣伝部にいらしたのですが、辞表を出して映画に専念されました。『永遠の1/2』の同時上映として封切られましたが、カルトを目指したはずの『私をスキーに連れてって』の方が大入り。単独で上映される運びとなりました。」

従来の常識を破る作品を、なぜそこまで思い切っ作れたかという、失敗しても「若気の至り」と開き直れるから。時代の映画に携われたというのは、僕には貴重な体験になりました。時代と作品は、切っても切り離せない。

経験の少ない若手を起用できたのは、レンタルビデオの普及があったからです。映画がコケても全国的に名が通っているキャストが一人でもいれば、ビデオで元が取れるから、若手にやらせてもいいや、という空気があったんです。

僕が映画を書く上で気をつけたことは、テレビドラマ以上にテンポを良くすることでした。つまらないとビデオを観る時に早送りされてしまうからです。その頃、フジテレビの大多プロデューサーが僕らのところに来て「私をスキーに連れてって」をパクらせてくれと言ってきました。そして作られたドラマが『君の瞳に恋してる』です。フジテレビのトレンドイ・ドラマの第一弾ですね。これ以降、フジテレビのドラマの視聴率が良くなったんです。

ただ、「これで、せつかく良質のテレビドラマを書けるかな」と思うようになったら、「マジメなの、やめ



ようよ」という風潮になってしまったんですね。ホイチョイと『私をスキーに連れてって』『彼女が水着にきがえたら』『波の数だけ抱きしめて』『三本を作った』ところで、バブルが終焉を迎えました。ちょうど時代の区切りだったんです。」

### 作りたいものを作る

「三十代に入ってから、プロデューサーと相談するというよりは、自分のやりたいことを提示して周囲を説得して作っていきけるような立場になりました。『僕らはみんな生きている』という作品は、死を前にした方がイキイキキするというテーマで一九八七年頃に考えていたが、公開まで七年間かかりました。一九九〇年頃に考えた『彼女が死んじゃった』は十一年かかって日テレで連ドラになりました。」

今までは声をかけられた企画に自分の色を入れていく作業だったのが、この頃からは自分の枡の中にみんなを入れていく形になったんです。例えば『病院へ行こう』という作品は、ホスピスを舞台にコメディをやりたいと思っただけです。ゴールが見えたお陰で、全力で走れるという物語です。ホスピスでコメディというのは反対も多かったが、実際にホスピスにいる現場の人たちには歓迎されました。僕は、作り手の論理になりたくない。自分が観たいものを作りたい。作り手になると、観客を下に見てしまう。だんだん自分が観ていた時の気持ちを忘れ、書く側、送り手側の気持ちになってしまふ。だから、つまらなくなる。

いま作りたいのは、マリリン・モンローとジョー・ディマジオが新婚旅行で来た日本で過ごした二四日間の話。英語脚本になるので障壁も多いけれど、「いつか、これを作りたい」というものを持っていると、日々の仕事をこなしていけるものです。

現在は、オリジナル作品が消えてしまった。ドラマも映画も原作モノばかりです。原作モノだと、脚本家に力がかからない。現在、唯一の活路と感ずるのはインターネットです。ネットで公開し、DVDにして、最後に劇場公開するという今までの逆のパターンが出ていくのかもしれない」

### 近著『うつから帰って参りました』

「ドラマや映画は共同作業ですが、一度、自分一人で作るものを作ってみたいと思っていた。そこへアスコムさんからお話を頂きまして、鬱病という病気について、専門家や医者ではない一患者が個人的に語ったものを書いてみようと思いました。鬱病は本人も辛いけれど、むしろ周囲の方が大変です。書いてみると、けっこうドラマだなぁと思いました。今回は体験した出来事を書きましたが、今度は完全なフィクションの小説というものも書いてみたいですね」



『うつから帰って参りました』(アスコム刊) ドラマ作りへのめりこむあまり、うつ病を患い、消えてなくなりたとい七転八倒の逃避をする一色氏が、家族の力を得て、病氣と向き合い克服するまでの切なくもおかしい闘病生活をテーマにした、初めてのエッセイである。